

【症例:マルコム】(3-5歳の男児のセラピー)

～心の器(containment)をめざして～ (1974)

Kate Paul

マルコムJ が週5回の精神分析的サイコセラピーを開始したのは、彼が3歳のときであります。その後2年の歳月を経て、今尚も治療は続いており、まだもう少しは必要とされております。これまでの2年間の分析資料を振り返り、治療経過の中で「分離不安」がいかように惹起され、またそれを抱える‘心の器(containment)’がいかように生成されるに至ったかを述べてまいります。

まず最初に、マルコムの来歴やら病態像、それに生育歴を簡単に記してまいります。それから治療が極度に混沌と化した初めの数ヶ月に付いてお話いたします。マルコムは当初、最も具体的な方法でセラピストに侵入し、コントロールしようと企てたのでありますが、それは即ち彼自身の排泄物を使うことだったり、或いは自分のからだを使っての実力行使の攻撃といったものであります。彼は絶え間ない不安状態に陥り、何週間も続いて下痢状態が続きました。またセッションの中でも或る種の幻覚 hallucinations を呈しております。それから彼は徐々に、治療の中で提供される自分の自分を抱えてくれる‘心の器 containment’に気づき始めるに至り、それでどうか不安感を象徴化できるようになり、彼の極めて熾烈な感情をセラピールームにそして転移上にとどめおくことができるようになったのであります。やがて彼は【プレイグループ】に参加できるようになりました。それは以前ですと、怯えて竦みあがるばかりでとてもとても無理なものでした。こうして治療はようやく根づいたといえます。

次いで、翌年の治療の進展具合について簡単に述べますが、その中心となる課題は‘心の器’といったテーマであります。

最後に、私は治療第2年目の数ヶ月のあらましについて語りましょう。それはこうしたものであります。すなわちマルコムは、自らの想像の産物である‘乗り物 vehicles’をあれやこれや続けざまに考案し、それらについて語っております。これらはいふなれば‘心の器’としてのセラピストの代替物でありました。即ち、セラピストが彼にとって絶えず接触を求めたくともあまりにも当てにならない・頼りにならないと疑心暗鬼だったせいでありましょう。これら‘空飛ぶ乗り物’は、やがてマルコムが自らの情動により直接的に触れられるようになり、対象 object の外であっても、自分の足が地に着いたものとなり、もう大丈夫といった気分になるにつれ、次第に地へ向って方向転換してまいります。そしてこうした第二次的な‘心の器’ secondary containers は、マルコムが第一次的な‘心の器’としてのセラピストとの関係性を探索し始めるや、徐々に背景に斥けられてまいります。こうして地に向けて彼の気持ちがギア・チェンジされていったことは、幾つか他の変化にも関連してまいります。とりわけそれらの中でも最も重要なのは、彼の攻撃性を忍んでくれてかつ生き残れる能力の備わった誰かがいてくれるといった信頼感が募っていったことでありましょう。これは、マルコムが転移状況において、セラピストを父親及び子どもらと実り豊かに繋がっている母親として受容し始めたということが必然的に伴われていると考えられます。

分析資料には、折々にJ.家での家庭状況にも触れております。マルコムが危機をくぐり抜け、堪えて尚も成長し、最大限与えられる援助を活用できるかどうかは、他人を自分とは違うものとしてわきまえる能力に大きく依存しているといえます。それぞれが別々であるということ separateness はこの時点でのマルコムに関して申しますと、物事がうまく行かないときには万能感的な罪悪感 omnipotent guilt をそれほど感じなくても済みますし、また物事が調子よく行っているときには万能感的な理想化 omnipotent idealization にさほど縛られずに済むように思われます。

■ 来歴及び病態像について

マルコムは幾つかの多様な症状で来所しております。彼は家庭内で騒動を引き起こすことがありました。両親の間に割って入り、互いを話させまいとしたり、彼らが何か一緒にしたりすることを邪魔立てします。絶えずからだごと突っかかってきたり、かなきり声をあげたり、自分の方に彼らの注意を執拗に求めるのでした。彼は大人とは万事自分に注意が注がれている限りではうまく関係づけることができたのですが、その一方、子どもらに対しては怯え身をすくませるばかりで、他の子がほん少しでも攻撃を見せようものなら、顔を青ざめ、母親の元へと駆け寄ってゆくのでした。マルコムが2歳半のとき、妹が誕生しております。彼を妹と一緒にしておけませんでした。ちょっとでも目を離すと、彼はこっそりにじり寄って彼女に手を上げひどく叩くことがありましたから、とても危険なものでした。彼は毎晩悪夢を見ました。起こしても全然鎮まらず、部屋中ぶち壊さんばかりに喚き声を響かせるのでした。彼は壊れた物にはくよくよと頻りに気に病むのでありました。彼は【プレイグループ】に参加し始めていたのですが、それもものすごく嘔吐を繰り返すやら大泣きして涙するやらで惨憺たる結果に終わりました。彼の母親は、彼をどう援助していいやら戸惑っておりました。彼は何が怖いのかを語ろうとすることはほとんど無かったからです。何かしら動揺したり怒ったりといった事態では、その後彼は自分がそこに居なかったとでもいうようなふりをして、両親が何について語っているやらぼくはちっとも知らないよといったふうを装ったからです。彼はいたわりやら慰め、或いは抱っこにも反応しそうにありません。ごく稀に彼が自分の不安感を吐露し得たとしても、或る一つの質問を繰り返すということを執拗に続け、それでたとえどんな答えを貰ったとしても、それで満足はしないのでありました。

■ 生育歴について

マルコムはお乳をガツガツ貪り飲む赤子でした。最初の2、3週間の間、Mrs. Jは自分のおっぱいが充分お乳を与えられるものかどうか不安に覚えたほどであります。彼は授乳中まるでおっぱいに没頭してかぶりついており、乳首が口から抜けて外れたりすれば即座にかなきり声をあげるという具合でした。彼の授乳の回数はかなり頻繁に必要とされました、昼となく夜となく・・・6ヶ月目になると、彼はおっぱいの片方を完全に拒みました。そして9ヶ月目にMrs. J が離乳を試み始めた際、彼はおっぱいを両方共拒み、そして直ちに哺乳瓶へと移行したのです。その後の数ヶ月の間、もし彼が母親のおっぱいを目にしたりとすると、カンシャクを破裂させてかなきり声をあげるのでありました。固形食が導入されたとき、彼はそれを断固拒みました。来所当初、食事は父親から与えられる場合のみ受け入れ、もしくは母親が彼に背中を見せているときに限って彼は自分で食事を摂るという状況にありました。

トイレの躰けに関しては、2歳時に終了しております。が、時折2、3日間、彼は完全に失禁状態に舞い戻ることがありました。彼は着衣が大嫌いで、靴も滅多には履きません。固い土の上ですらもそうなのでした。

■ 治療の最初の4ヶ月間について

最初のセッションに私が待合室にマルコムを迎えにいきましたところ、彼は肘掛椅子にちんまりと納まって坐っておりました。そんな具合で私の方を好奇心に満ちたふうに見上げました。彼はがっちりした体躯でありましたが、年齢にしてはちょっと小柄に見えました。彼は大きな肉感的な顔立ちをしていました。丸い黒い目、柔らかな丸味を帯びた赤ちゃんっぽい唇と丸ぼちゃの頬っぺです。全体に丸味を帯びた顔立ちではありましたが、しかしながら、どこか青ざめた、疲れきったふうな表情を浮かべておりました。彼の目は曇りがちで隈取りができておりました。彼の虚勢と魅力の裏側には、どこか窮屈で不安そうな様子があり、顔色も冴えません。彼の腕やら脚はかさぶただけでありました。血が出るまで引っ掻いたのでしょう。それに彼の爪先はかなり激しく噛まれている形跡も認められました。

私が自己紹介すると、彼はちょっと不安げに自分の足のつま先を握りしめ、その片方を引きちぎるかのような仕草をし、ちょっと笑いました。彼は、私が彼を引きちぎるんじゃないかという恐怖を抱いたのを笑いで誤魔化したかのようにおりました。母親のやさしげな励ましに支えられ、彼はセラピールームへと歩み始めました。私にちょっと恥ずかしそうな笑顔を向けながら…。それから母親はもう彼にとっては存在しないかのように、サヨナラも言わずに離れて、私と一緒に歩みを進めたのであります。彼の注意は、今やまったく私に、それから部屋の中のものに固定されます。それはまるで彼の心の中では一度に一つのことしか受け入れるスペースがないといったふうでありました。

彼はお部屋に用意されていた自分用の引き出しへとまっしぐらに駆け寄りました。私は彼に、セッションの時間のこと、彼の引き出しの中身が彼固有のものであること、それに私に会いに来る目的などについて簡単な説明をして、彼をしかるべき状況へと誘い、落ち着かせようとしたのですが、そうした私の試みにはまるで頓着しないふうなのであります。すでに彼は引き出しの中の物をあれこれ調べることに夢中で、一つひとつを取り出し、そしてすぐさまポイポイと投げ捨てたのです。彼は幾つか車の入っている箱を取り出し、それぞれの容器の蓋をも開けました。彼はもっと開けられるものはないかと調べてゆきます。彼は赤ちゃんっぽい、あどけない声で<これ、ナンだ What dat? これ、ナンだ What dat? >と私に訊きます。そして私がすぐさま答えないと不安げになります。私は彼が玩具へとまっしぐらに突っ込んだみたいに、私の使う語彙にも突っ込んでくるように感じられました。私が物に名前をつけ、それも彼に馴染みのある言葉を使うならば、彼にとってより安心だったように思われました。

私は、彼がここでは赤ちゃんのように感じることを、そして彼は私の内側 (inside) がどんなふうかを知りたいと思い、それでその内側へとまっしぐらに突き進んで行きたいとも思ったりするんだけど、でもその内

側がどんなふうかを怖がっているわね、と語りました。それから彼は、家具を調べ始めました。そして椅子の裏のネジを捻って外そうとしました。それから部屋中のプラグやらスイッチをも調べ、扉を開けて廊下の外をちらっと眺めてみました。それから、彼は<扉も、椅子も、それに玩具の箱も壊しちゃったから、もう部屋中真っ暗になっちゃったよ>と言い、恐れ慄き、ママ！と大きく叫び泣きわめいたのであります。私が再び語ろうとすると、彼のかなきり声はさらに強まります。そこで、そのかなきり声がすこし小康状態になったとき、私は彼にこんなふうに語りました。<この部屋の物たちは、私の内側にあるのとそっくりのようだね。まるでママみたいなんだね。そこに君が押し込んだんだね。だから私は暗くて、怖くて、壊れているものでいっぱいになっちゃったというわけね。それから、今度はそのお返しにまるで私の言葉でそれら全部を君の中へと押し戻すように感じちゃったわけだね>。そうすると、彼のかなきり声はちよつと収まり、シクシクの泣き声へと変わりました。

このように初回のセッションでは、猛攻撃の侵入から始まり、それに次いで非常な恐怖 terror やら閉所恐怖症 claustrophobia が惹起されたということになります。これはこの後もしばしば繰り返されるパターンであります。しかしながら、こうした治療の最初の2、3週間でまた彼は、私を全面的に侵略しきれものではないということに気づき始めております。最初彼は、私が実際に彼のお家に訪ねてくるとか、彼を私の自宅に招いたり、車でドライブにいつも連れ出してくれるんだというふうに感じていたはずで、それから彼は、私が或る一定の時間内にプレイルームでしか彼と会わないということを理解し始めたのです。そうでありますから、彼の怒りと迫害感とは募ってゆくばかりでありました。彼は部屋中に糞便やら尿を垂れ流しました。同時に、Mrs. Jから、彼がセッションの前によく嘔吐すること、そして家中に糞便やら尿をも垂れ流すことが報告されております。

こうした治療上の物理的空間及び時間的な制限に出くわしたとき、その幻滅の衝撃がマルコムをして私に対して極端に原始的かつ具体的な形での‘無差別テロ’を開始することとなったのです。彼は来所の度に、時としてセラピールームが焼け落ちてしまってるか、或いはメチャメチャに壊れてしまっているのではないかと思うようでありました。これは彼の内側で私をこなごなにしていることと一致しているのです。これはまた、彼自身と外界との間の混乱の程度を示唆しております。彼は絶え間ない下痢状態に陥っておりました。それでもどうかクリニックに通っては来たのでありますが。彼は便器やらトイレを使うことはクリニックでも家庭でもしないのです。彼は彼の混乱(mess)をうまく収めてくれるほどに充分安全な容器 container などどこにも無いと感じていたようなのであります。

時折私は、こうした破壊的状况からどのような成長が期待し得るものやらと内心想ったものです。しばしば私は何が起きているのやらさっぱり理解できませんでしたし、思考径路が断片化し、混乱を来たしてしまうのでした。私は、まるでセラピールームやらマルコムの引き出しがそうであったようにハチャメチャで混沌としているように感じたものです。部屋中どこかしこに物が散乱し、ごたごたになって混乱しており、どこにも秩序はないのですから。実際のところ境界 boundaries が設定されるべきでありました。そうした境界がない場合には、セラピイが‘心の器 containment’となることもありませんし、或いは

象徴的表現の発達する余地もあり得ないのです。最初の頃、私は彼に対していくらか許容的であったと思います。マルコムがシャツを脱ぐといった場合に彼が自分でできなければ手を貸すとか、彼の糞便をセッション中部屋の中に置いたままにしておくとか…。しかしながら、直にこれは彼を戸惑わせるということが分かりました。なんら制限なしに振舞うことを彼に私がむしろ仕向けていると感じたようなのです。又、糞便の臭いは私が思考する上で障りとなりました。そこで私は次第に制限を設けることにしたわけです。それが私にとってごく自然に思え、マルコムにとってもより安心を与えたと思われる。私はセッション中に彼がシャツを脱ぐことをやめさせるようにしました。彼が味わう身体的な興奮がセラピーにおいて理解するという作業から彼を逸脱させることになると思われたからです。私は彼の糞便をトイレに片付けるようになりました。そうすることで彼の‘この場を支配している’といった感覚を減少させ、私も仕事により専念できるようになったのです。私は彼にこうした技法上の変化について説明しました。そのようにして私が彼に対してより厳格となったことで、怒りとまた同時に安堵をも彼の中に認めたとするわけであり、こうした変化に対しての他の反応には解釈 interpretation が必要とされました。殊に、彼の糞便をさっさと私が片付けてしまうことで、私が彼に我慢ができなくて、彼を排除したがついていたり、或いは彼を罰したいと思っているといった感情についてであります。物理的な制限を設けられたことで、感情と身体とを区別する機会を与えられたことにもなりました。そうしてマルコムは自分を表現する上で身体的な方法以外のものを見つけ始めるに至ったのであります。

こうして徐々にマルコムの激烈な感情は治療内でどうか抱え (contain) られるようになり、他の場所ではあまり見られなくなってゆくのです。この時点で、治療開始の2ヶ月後であります。彼は【プレイグループ】に参加しております。彼は私に‘<ぼくのママは二階だよ>’と言いました。〔待合室、或いは別の次元では、からだの上半身を意味しておきましょう。〕 ‘<だけど、他のママがいるんだ。それはここに居るんだよ。トイレ lavatory って言うんだ…>’とも言います。彼は今や自分一人では抱えきれない混乱 mess を片付けるための場所を得たと感じていたことになり、彼はまた同時に、私の創造的で、かつ養育する feeding 能力を否定し、それをぶち壊したいとも思っていたのです。そうすることで嫉妬したり、あるいは疎外されたりといった感情を回避せんとしたわけであり、

こうして何週間かの間、彼は私を事実上‘トイレ’として活用したあとで、お部屋を《半分きれいで、半分トイレ》にしたいと申し出たのであります。その‘半分トイレ’の空間に、扉のすぐ脇ですが、簡易便器が置かれました。そこにはまた、想像上の侵入者を撥ね退ける意図があったともいえましょう。お部屋をこうして整えたことは、マルコムが善悪の両極端を区別し、心の内でもそれぞれを別々にしておけるといった精神的構造の発達にも一致するように覗かれます。

私がまるっきりマルコム専属の‘トイレ’ではないということの認識は、彼の中で新たな好奇心を募らせることになりました。他の子どもらの引き出しやら、戸棚の半分鍵が掛かっているところ、電熱器、壁、プラグにスイッチ、そうしたすべてが強烈で、興奮をそそる刺戟物となり、彼を大いに詮索好きにしたというわけなのです。マルコムは、それらの内に隠れ潜む何かで自分が疎外されると感じた場合には、

猛然と攻撃を露わにしました。これらひじょうに望ましい物体の一つひとつが、いろんな意味でマルコムには表徴として見られました。例えば他の子ども、もしくは赤ん坊であったり、それも彼よりも優先して私が何かを与えているものと感じられたのであり、またさらには大人の性的な行為やら考えやらも…。それは、例えばスイッチとかプラグの穴のように、彼にとって電気のように危険で興奮をそそる刺戟物となるのであります。やがてマルコムは、糞便やら唾の他にも、侵入的な攻撃を増強するための道具を持ち込んでくるようになりました。スクレーパー、ハンマー、ねじ回し、それに玩具ののこぎりであります。爪、歯、舌、ペニス、糞便、それらは小児的な転移状況において‘武器’として解釈されました。

さて、セッションの始まりと終わりに目立った動きが出てまいりました。マルコムは階段でぐずぐず居座るなどわざと開始時間を遅らせたり、終了時刻にはああでもないこうでもない引き伸ばしに掛かるのであります。彼はまた、こっそり姿が見えずとも部屋を出入りできるといった魔法を使うやら、扉をチョンチョンと叩いてはそれをナイものにするといったふうなことをもしました。それらは境界 boundary を否認する方法であります。こうした態度は、部屋の境界にだけでなく、その内容物にも当て嵌まります。こうした境界 boundary とは、すなわち私の皮膚 skin を表徴しているように思われます。つまりは、部屋の物たち、そして彼の中で空想された私の内側から彼を隔てる境目なのです。彼は、私を完全に侵略しきれないし、私が内に包容しているところのもの contents を破壊的な方法で掠奪したりもできないと悟ってゆくなかで、どうやら自分に与えられているものを利用することが取り敢えずは無難だと感じ始めたようであります。

或る日のセッションで、彼はいかにも驚いたふうに、<ぼくって、全然部屋の中の物で遊んだりしないんだよね>と言います。それから時には部屋の中で<これってなかなか素敵だね>と思えるものを探し始めてゆきます。彼はボールを手に取り、その丸味のある形が大好きになりました。それから画用紙も、その滑らかさが、そしてタオルも、その清潔さが、そしてクッションも、その軟らかく白いのがとても気に入りました。彼のそうした理想化された対象物はあらゆる意味で彼にとって一個ずつでしかありません。彼は一個の対象物を選び分け、さらにはそれに特徴的な或る一つの性質に狂喜するのであります。彼が好んだ物たちの性質とは、軟らかいこと、手触りがいいこと、しなやかであることで、その一方で、いかなる固さも、彼には恰も糞便が自分の内に突っ込まれるといったふうを感じられたのです。そうした場合には、クッションも中に固い塊りがあると感じられ、紙もくちゃくちゃだったり、タオルは汚れていると感じられるといった具合でした。そして私の語る言葉も、そしてボールも、彼にはまるで自分に撃ちかかってくるように思われたのです。

このことは、彼の心の中では一度に一つのことしか収めるスペースがないといった最初の印象に繋がると考えられます。「一対一といった理想化された関係性」は、他の異なる対象もしくは対象のいろいろな他の側面 aspects が一緒に寄せ集まることを断固として阻むわけです。しかしそうなると、マルコムは、それら対象やらその内容物たるもの contents が今度は自分に対して破壊的な報復を企てるのをむしろ煽ってしまったと感じるのです。ここで私は自らの中に2種類の逆転移 countertransference

の感情を観察しております。一つは、彼が私にとって最大の特別な子どもであり、我々は相互に理想化されていて、排他的であり、互いに熱愛しているといったもので、他のもう一つは、彼が自分の感覚 senses にすっぽりと覆われている間中、私はジリジリと苛立っており、まったくのところ不要なる人として排斥されているといった感情であります。

マルコム理想化された対象との一体感は、しばしば黒い昆虫やら野獣やらの攻撃を想像することで頓挫してしまうようでもあります。そうしたことは遊戯と幻覚との狭間の辺りで起こります。11月の末頃の或る日、彼は私の向かいの整理たんすの上に座り込んでおりました。彼はちょっとふざけたふうに、私が白いリンゴを持っていて、彼はそれがとても欲しいだけど・・と言いました。とても白くてきれいなんだとか。しかし私の方に近づくことはできないのだと言います。というのは、1匹の、とても気持ち悪い大きな黒い昆虫が床の上に這っていて、もし彼がちょっとでも動こうとするならば、噛み付くからだそうです。彼は、この空想にとっても耽溺していて、今やそれはまさに現実にはかと思えないというわけです。こうした分裂・排除された split off 攻撃性はとても強力で、恐怖でからだを金縛りになる前のほんの一瞬しか期待 hope を抱くことができないというわけなのであります。

他の子どもらに対しての彼の恐怖心は、上記の例やら他にも似たような資料から徐々に明らかになってゆきました。彼が怖れる子どもたちは‘噛み付いてくる黒い昆虫’なのであります。

この段階ではマルコムの破壊欲についての罪悪感 guilt、もしくはそこに潜在している恐怖は、彼自身によって経験されることは滅多にありません。どちらかというと迫害感 persecution が支配的だからです。しかしながら、治療に入って3ヶ月経った頃、彼の両親の間に諍いが起こり、別居状態となりました。そこでマルコムが私に語ったことというのは、自分の歯を全部引っこ抜いてしまわなくてはならないということでありました。つまりそれは、決してものを噛むことができないように、ただ歯茎を使ってものをそとやさしく吸いこむことしかできないようにというわけです。私はここで、パパとママとは‘乳首 nipple’と‘おっぱい breast’であり、彼はそれらを噛み切って別々にし、傷つけたと思ってるかと語りました。それに又、私も彼が攻撃してくるのにははや耐えられないとも思っているとも・・。そうしますと彼は、身を乗り出してからだのバランスを取ろうとしました。そして<ほら、からだを宙に浮きあがっちゃった>と言います。私はそこで、彼は私を噛みつき傷つけズダズダにしたものだから、もはや彼を抱き抱えることなど出来はしないと感じたのだと語ります。[それでつまりは彼が宙吊り状態のままではいけないわけでありませぬ。]次の週末には、彼は、不意に救急車がピーポーピーポーとやってきて私を連れ去っていったのを聞いたように思ったということがありました。しかしながら、こうした感情を彼が語れたということは、その能力にも付随して、或る意味私が彼の不安感を許容しうる、或る種の堅固さを備えてき始めたように感じられたということがありましょ。誰一人として彼には我慢できないというのが、彼にとって一番の悩みだったのです。このことを、彼は最初の休暇[セッションの休み]を控えたその直前のセッションで劇的に表現しております。彼は傘を持参し、それを扉の取っ手に引っ掛けました。彼は私の膝を慕わしげに抱きかかえ、そしてすすり泣きながら傘へと駆け寄ってゆき、<あのね、ほら、ずぶ濡れになっちゃった・・

>と言います。私は、休暇中雨の中にずぶ濡れのまま置き去りにされると彼が思ったのだらうと語ります。それから彼は、<以前お家で子犬を飼っていたことがあるんだけど、小さな子どもや赤ちゃんに噛み付いたり引っ掻いたりするので、どっかへやられてしまったんだよ・・・>と言います。誰も子犬のそうした乱暴を止められなかったというわけです。私は、彼が私の子どもたちやら赤ちゃんをも噛み付いたり引っ掻いたりしたがつているせいで、私が彼を追いやってしまうのだと感じている。そして私がもう我慢の限界だと思って、彼を片付けてしまおうとしたと彼が思ったようだわねと語ります。

やがてマルコムは、ごく稀にはありましたが、日々の暮らしの中で彼の心に何らかの作用を及ぼした事柄について語れるようになってきております。彼は、セラピストそしてセラピールームとは、情動 feelings が安心して持ち込まれていい、そしておそらくそれは理解されるであろう誰か person であつたり場所 place でもあるといった考えを持ち始めていたわけです。彼はセラピールームで排便したり排尿したりすることはぐんと少なくなり、トイレへ行くことの方が多くなっておりました。彼はさまざまに象徴的な方法で自己表現を試みるようになっております、それもしばしば大変具象的 concrete な性質のものではありましたが・・・彼は、自己流ではありましたものの、‘いいこと nice’と‘悪いこと nasty’との区別ができるようになってき始めましたし、そうして迫害感やら攻撃性をもようやく棚卸しできるようにもなってきたといえましょう。これは、治療が4ヵ月を経た頃のことです。

こうした葛藤やら混乱の領域はすべて、治療において尚も継続して探索されてまいりました。しかしながら、マルコムがそれらを探索するにしても、まずは物理的なセッティングならびに実践上の取り扱い management になんら問題がなく安定している secure 限りにおいてのみ可能なのであります。詰まるところ、それらが心の器(container)としてのセラピストを表象しているわけなのであります。

■ 第2年目の治療について

マルコムが治療中に自前で発明した‘心の器’としての乗り物について語ってゆくまえに、私は、第2年目における治療進展の主要な幾つかについて簡単に述べておこうと思います。特に‘心を抱える器 containment’についてであります。

第1回目の休暇を終えて、マルコムは、猛烈な攻撃欲を表出したり、また同時に損傷の憂き目に遭うものたちを巡っての恐怖心にも悩まされるといったことを行ったり来たりしました。またどちらかというと躁的 manic であり、支配的な行為が目立ちました。それは怒り、迫害そして絶望からの逃避としてあつたように思われます。彼は部屋にある家具の一つから一つへと跳びはねます。絶えず動き回ってじつとしていません。一見ドラマチックでもあります。見せ掛けのドタバタ芝居のようでもあり、それら内容はというと薄っぺらくかつ脆いように見えました。彼は自分の内側がバラバラに断片化されていると感じていて、今にも自分がこなごなに砕け散ってしまうのを怖れているかのようでもありました。ときどき彼は床にぱったりと倒れることがあり、そして恐怖に慄き、かなきり声をあげるのです。そうした折には、私は彼をしっかり抱えてあげるなどとても不可能だと感じられているように思われました。彼は木っ端微塵

なることや壊れたものの破片について語ることがありましたが、それらは部屋の中にあるに違いないと思われたのです。彼はたまたま万華鏡の中にそれを見つけたのですが、〔その万華鏡 kaleidoscope を、彼は間違っって ‘pauleidoscope’ と発音しております〕、つまり彼は私の中には多くのちっちゃな破片がいっぱい詰まっているといった景色を目に浮かべていたというわけです。

こうした恐怖の状況は、或る部分では ‘転移関係’ に関わっており、そしてまた或る部分当時の困難を極めた家庭状況にも関わっております。それら破壊的な空想を分析したことで、マルコムがお家の困難を受け入れると同時に、時としてその恩恵についても受け入れられるよう彼を助けたものと思われれます。彼が内なる現実と外なる現実の区別ができるようになるにつれ、彼の母親にもまたセラピストの中にも彼が決して万能感的に破滅へと追いやることのできない或る意味での強靭さ strengths を認めるに至ったのであります。

第2回目の休暇が近づいた頃、マルコムはますますどうすることもできない無力感を募らせ、サポートを必要と感じるようになります。休暇を間近に控えた或るセッションで、彼は床のど真ん中休暇予定表 holiday-chart を置いて、その上に座り込んでおりました。そして彼は、<ぼく、悲しいことには海の中にいるの。でもまだ泳げないんだ・・>と言います。この事態で私には彼がとても小さくて、そして傷つきやすく、無防備にも見えました。それはいつもの躁的な気分が支配的であるときの彼がどこか実際よりも大きく見えるのとは対照的でありました。そこで、彼は海の中というヤバイ状況からさっさと逃避し、次には或る機械へと鞍替えしました。それは家具から自分で作ったんだと彼は言います。それは ‘芝刈り機 mower-machine’ であり、大きな歯状のものが付いていて、それにその後ろにはゴミ袋も付いているといった具合です。そこで私は彼にこんなふうに語りました。私が休暇でいなくなり、彼を悲しみの涙の海に置き去りにすると感じ、たちまち ‘芝刈り機’ へと飛び移ったことを指摘し、それというのも、それで彼は私を噛み砕き、さっさとゴミにしていまいたかったからだ。なぜなら彼は自分が置き去りにされることにひどく怒っているからであり、それから彼には歯とお尻はあるものの、胃がない、だから食べ物を消化して育ってゆくということができないと感じているからなのだ・・。

おそらくは海 sea はまた、彼を悲しい思いにしたのですから、彼の自己洞察力ともいえる ‘見ること seeing’ を表象していたのであります。翌月の間、この芝刈り機は、‘chewer-upper 生ゴミ圧搾機’ に変わりました。それには付属として ‘清掃車 dustcart’ も付いていました。これらのものは再び、彼が苦痛で耐えられないと思う感情やら洞察から逃げる手段として用いられたこととなります。

治療の第1年目の終わり頃には、彼から手助けを求める叫びがしばしば聞かれております。マルコムは昆虫や野獣に攻撃されないような安全な場所を部屋のどこかに探して欲しいと言うのでした。それやら彼の引き出しの中身を整理するのに手助けして欲しいとも言うのでした。つまりゴミとそうではなく保管しておかねばならぬ物とを区別してくれということでもあります。尤も彼は、玩具やら家具に対してそれが備わっている力 strength にも激しい抗議の声を上げるのでした。

心の器 (container)としての私やら、またその私が内側に抱えるものにおいて彼が感じ取る力 strength とは、私という存在がマルコム専有とは限らないということを意味しております。今や時として私は逞しいパパに支えられ、子どもらの世話を毛できるママとして感じられるようになってまいりました。マルコムは、パパと共謀し、ママに対抗せんとパパを誘惑しようといたしますが、パパは断固とした、分別のある声で申します。〈ダメだよ、おまえ、私はそうはしないからね。おまえもそうしてはならないよ〉と。これまでマルコムからそうした声など一度も聞かれた例などありません。マルコムは休暇の予定表〔第3回目のそれ〕がかもすところの威力 strength について言及します。そしてその予定表を書いたペンをどこで手に入れたのか、そして今どこにあるのかを知りたがります。そこで私は解釈します。そのペンなるものとは‘ペニス’を表象しているのであり、それが私に厳格な態度 firmness やら意志力 strength を付与しているとマルコムが感じたのだと。。

Mrs. Jは、マルコムが今や4歳になり、ようやくごく‘普通の子ども’みたいに、慰めやら抱っこに快く従うようになったということを私に語っております。しかしながら、休暇の後、家庭内状況において後退 setbacks が起きております。この時期マルコムは、母親の中に、そして治療内でも、そのいずれにも彼が辛うじて認めざるをえないところの、或る種の力強さ strengths に幾らか怒りを覚えていたように思われます。彼は彼の描いた絵を保管してあった箱を壊しました。そして部屋の壁やら扉をも攻撃することに逆戻りします。彼は私の皮膚をも攻撃し、引っ搔こうとします、つまりそれもまたある種の‘壁’であったわけですが。彼のからだには発疹ができ、それをしつこく腕や脚のあちこちを血が出るまで搔きむしってひどくすることがありました。彼はまさに混乱の状況へと逆戻りしたかのようです。セッションの終わりに尚も内なる混乱 mess を抱えながら、また一方で家庭は何ともうまくない状況でしたし、だからそうした苦痛を回避せんと躍起だったというわけです。彼を見捨てていなくなる私に対しても当然の報いとして混乱 mess を残してやろうと敢えて露骨にそうしたともいえましよう。

しかしながら、彼には、絶えず壊してばかりで、それで‘容器 container’がなくなってしまうことを惜しむ気持ちがありました。彼はなにやらせつなそうな面持ちで、〈もつとしっかりした箱があればいいんだけどなあ。。〉と申しました。或る日、治療が始まってから2年目に近い頃ですが、彼はこの後悔の念をはっきりと吐露しております。彼はおもちゃの学生鞆 satchel を持参してまいりました。彼はさも嬉しげに中に‘秘密’が入っているんだと申しました。彼は私をおもちゃの鉄砲で撃ちました。それから彼は飛ぶふりをしたのです、が地面に落ちてしまいます。彼はここで〈強い鞆が欲しかったんだけどなあ。。〉と言います。そこで私は、私が鞆のように、私の内側に物を隠し持っていることに彼が怒っていること、だから私が‘秘密’を持っていると感じており、それで私が内に秘めるところのありとあらゆるものを欲しがっているんだわねと伝えます。そうして私が語っている間、彼は尚も私を鉄砲で撃ち続けます。それから、突然私が爆発しちゃうのではないかと怖がり、その場から逃げようといします。そして彼は自分の周りにぐるりと線を描きながら、〈おまえなんか、勝手に大きな鞆になればいい。だけどそしたらぼくが引き千切って、バラバラにしちゃうからね。それで生ゴミ用の圧搾機 the chewer-upper に投げ込んで、おまえなんか処分してやるんだから。。〉と応酬します。そして彼は一旦間を置いてから、ちよつと当惑したふうで

思い悩んでいましたが、間も置いて又もや<あなたが鞆でいてくれたらと思うんだけど、でもそうしたらぼく、あなたをやっぱりさっさと要らないからって処分しちゃうんだ、そうでしょ・・>と言うのでした。

ここに至って、こうして彼は時折、自ら招いたところの窮状に当惑することができるようになっております。彼はしばしば以前のように、取り付く島もないほどに接近不能だったり、コントロール不能といった状態に陥ったりもしましたが、彼は己れ自身の内なる世界を統合的に抱えるための‘鞆’もしくは‘容器 container’を内面化し始めていたといえましょう。それは、彼の部分部分、それに諸々の感情が対処する暇もなしに雲散霧消してしまうのを阻むためでもあります。

■乗り物シリーズについて

マルコムは、私が第4回目の休暇の予定を彼に告げたあと、一連の‘乗り物 vehicle’を独自に考察することをはじめました。そこに自らを抱えそして支えるといった意図が見られます。こうした‘乗り物’シリーズは治療2年目の前半で展開されております。ここでそれらについて詳しく述べてまいりましょう。

私が休暇について彼に語ったとき、「空を飛ぶ家族 flier family」と彼が呼ぶところの‘鳥の家族’を彼は作りました。彼らは地球から飛び去って行くんだとか。それはこの地球が混乱に満ち溢れ、どこもかしこも抗争に明け暮れているからという理由であります。とにかく、彼らは食べる必要もない、誰も助けてくれる人なぞ要らないのです。その‘空を飛ぶ家族’は紙をくしゃくしゃに丸めたもので極めて雑っぽく杜撰に作られておりました。しかしながら彼らの万能感も大して長くは持ちません。飛行中彼らは食べ物がありませんからすっかり衰弱しきってしまい、また休憩する場所もないことから墜落したりもしてしまうのでした。それはまるで私が休暇を彼に告げたとき、私ならぬこの地球、つまり滋養に溢れ、堅固なる地球が足蹴にされてすっかり混乱の極みと化してしまったかのようにあり、それで私が彼に逆襲すると思ったみたいで、それから反抗的となり、捨て鉢にもなっておまえなんて、もう要らないんだから>と言ったというわけでありましょう。

この2、3日後、彼はお家をつくりました。そこには幾つかの家具類が隅に設けられております。これに取り掛かる前に、彼はセラピールームのデンとした扉と、それにガッチリした机に目を留め、いかにも腹立たしげに私に背を向けたのであります。彼は、<ぼくのお家はね、いのちが消えてしまうんだ。あなたから離れてしまうとね。だから、ぼくはここにずうっとずうっと居続けるつもりなんだ>と言いました。そこで私は彼に語ります。彼が私に背を向け、またいのちからも背を向けたのだということ、それは私が彼を締め出すからとひどく腹を立てたせいであり、詰まりのところ彼は私の中にずうっとずうっと居座っていたいと欲しているのだということ・・。

次のセッションで、彼は、<宇宙に一つの惑星があるんだよ。そこへぼく、行くんだ。その惑星にいる限り、ぼくは何も要らないの。何もなくても平気なんだから・・>と語ります。彼は窓の棚に座り込んで、そうした状況を説明してみせます。それから彼はそのままにならぬやら虚ろな、ぼんやりとした感じになりま

す。しばらくして後に彼は、<何も育たないんだ。ナーンにも新しいものを見つけることもないし・・・>と言います。こうした‘引きこもり’といった逃避行はこれまでも幾度か試みられており、それは結局のところ、餓死、酸素欠乏、衰弱、狂気もしくは死といったものに至るわけであります。時としてマルコムは彼の依存性 dependence から逃れんとし、また或るときには自分が生き残れないのではないかといった恐怖からも逃れんとします。そして或る時には直面するにはあまりにも恐ろしい、この地球の惨禍から逃れんとするのであります。一度或る時など、彼は私が‘噴火口’みたいだと言ったことがありますし、また別の或る時には、私が幽霊でいっぱいだとも言いました。そこで私は、‘噴火口’とは、彼が私に外へと閉め出されたときに彼が私の皮膚に開けたと思ったところの穴であろうし、また‘幽霊’とは彼が殺戮したと思うところの他の人びとであったろう、と解釈しました。

マルコムは、私がまったく全面的かつ排他的に彼専属としてひたすら献身するよう要求する彼の期待を裏切るとき、怒り狂った挙句に私を破壊してしまったと感じるのです。彼は、私という存在を認めたくはないのです。私の中にいると感じていたいのであり、そして彼と私とは一体であり、まったく同じと思いたいし、もしくは彼こそが私を創造したと欲していたわけなのであります。或る日、彼は2枚の画用紙を手に取り、それぞれの真ん中に円を貼り付けました。彼は、<これ、「ボタン・ブック」というんだよ。ぼくが作ったの・・・>と言います。私は、彼は‘おっぱい’と‘ボタン’即ち‘乳首’を自分が創造したと思いたがっていると語りました。彼は、自分を養い育ててくれるところの‘おっぱい’としての私をどうしても必要なんだということを断じて考えたくないであります。

彼は、まるで私の解釈の言葉が彼の耳へ甘く流れ入るかのように聞いており、そしてあどけなく微笑み、そしてこう語るのです。<ぼくがボタンを押すとね、それはぼくに歌いかけるんだよ。それから、ぼくね、本の真ん中めがけてもぐり込むんだ。そして同じ歌と一緒に歌うんだよ・・・>と。その後、この同じセッションで、彼は部屋の中のすべてのものを全部ぼくが作ったんだと言い張るのです。

このエピソードは、マルコムが大人の話しぶりを取り入れる才覚があることをはっきりと説明します。一つひとつの言葉はそれ自体、彼がまっしぐらにもぐり込むところの対象物なのであります。私はしばしばマルコムが、私が言わんとする意味を取ろうとする代わりに、ただ私の話し方をそっくり真似、それを無意味なものにしてると感じるがありました。私は極力単純に語るように努めることを学びました。さまざまな意味が豊富に盛り込まれた言い回しですと、その濃厚さゆえに興奮をマルコムの中に惹起してしまうわけですが、単純な言語はそうした興奮を避けるからであります。言葉の官能的な性質やら、ほんのちょっとでも誇張した私の側の言い回しは、彼にとってはぐるぐる回る渦巻きに押し流されるかのような、或る種の興奮を覚えたのです。この興奮は、例えば柔らかなクッションとか流れる水などに感じる滑らかさにも一脈通じるところの興奮と同じといえましょう。

さらには、言葉へ逃避することには或る種の安堵感もあるかと思われます。それは即ち、彼に潜む原始的かつ熱狂的感情の余韻からマルコムと私自身の気を逸らすための‘二次的な容器

secondary container' として役立つ、防衛的な言語の活用であります。言語が防衛的に使用される或る種のタイプとは、回避されんとする或る種の不安感にリンクされているように思われます。官能的な刺戟として言語が使用される場合、そこには無感覚 deadness やら不快感といった感情が敢えて避けられているわけでありませぬ。

「ボタン・ブック」によって明らかになったところの言語による支配的な活用自体、排斥されているとか依存しているといった感情からマルコム自らを防御するわけでありませぬ。他のしばしば用いられる言語的な逸脱としては、巧妙な口喧嘩やら或いは言葉のゲームにも一脈通じる知的詭弁 intellectual sophistry といった類いのものが挙げられます。そのようにして言語的アクロバティックの罠に私自身嵌ってしまうことがあり、それがために、私に何を言われているのかよく分からず、理解して付いてゆけずに関係性から脱落してしまうといったマルコムの恐怖に寄り添えないことがあったように思われます。

大概のところ頻りに彼が躍起となったのは、私の中へもぐり込もうとすることであり、もしくは依存 dependence やら別々といったこと separateness のヤバイ状況に抗ったり、またそれから必死に逃れる算段をすることでありませぬ。それがため、彼はしばしば自分自身が何を本当に必要としているのか、そうしたニーズには無頓着であったといえませぬ。第4回目の休暇直前のセッションでは、彼は青ざめた深刻そうな顔でやってきて、床に座り込みました。いつもの家具の上に居座って私を見下ろすようにして構えているときの彼とは随分趣きが違います。彼は、<なんだかもうメチャメチャだ。髪の毛はグジャグジャだし、まるっきりごたまぜなんだよ。でも、それがどうしてか分からないんだ・・>と語ります。私は、ママに髪の毛を櫛でとかしてもらったのかしらと声にして問い掛けませぬと、彼はそうはしなかったと返答します。<誰にもそんなの、してなんか欲しくないんだもん・・>ということでした。そこで私は彼に問題提起します。<それと同じだわね。ここでも私に君のメチャメチャやらグジャグジャやら、こんがらがった考えを一緒に整理してもらおうとはしないわよね。私を必要だと思いたくないんだものね>と指摘したのであります。そうませぬと、彼は私に引き出しの中身を整理整頓してちょうだいと頼みます。私が彼に用意してあったもの、そして彼が後で持ち込んだものを区別して欲しいということでした。彼は自分ではもうまったくのお手上げで、だから私が彼のために全てやってくれるといったふうに私に依存的であるか、或いは、万能感的に彼が全て自分で片を付けられるといったふりをするかのいずれかであるということがこれで知れたことになりませぬ。

私の2週間の休暇が1週間過ぎた頃、マルコムは痛く動揺をきたし、日中泣き喚くことが多くなりませぬ。夜には野獣やら、狼そして鱷などに攻撃されるといった悪夢にうなされ、しばしば目覚めるということがありました。

Mrs. J.は専門家の援助を受けておりましたから、マルコムの心身の痛苦 distress に対処することは辛うじて出来ませぬし、マルコムもまた自らの不幸感を家庭内で表出し、母親に慰めてもらうことを受け入れるようになっていました。これは双方共にとても重要なことなのであります。以前ですと、治療

に訪れた当初ですが、彼は怒りと迫害感を抱えきれず爆発して大騒ぎするか、或いはそれらは何食わぬ顔といった躁的でちょっと男っぽい振る舞いに覆い隠されていたわけでありませぬ。このように、上記のセッションにもあったように、ようやくのこと彼は怖がって混乱を来たした子どもになることが出来、母親にも一緒に不安感を抱えてもらうことを受け入れ始めるようになったのであります。

休暇明けの第1週目の週末以降、マルコムはセッションに、彼が‘ムーンバギー’〔訳注；バギーはベビーカーの事〕と呼ぶところの小さなジープのようなおもちゃと、2つの赤ちゃん人形、それにおもちゃの救急車とを持参してまいりました。彼は2つの赤ちゃん人形をまるで1つでもあるかのように語りました。赤ちゃんは病院へ行く途中なんだとか。＜赤ちゃんはね、看護婦さんに看てもらおうの。それでからだをよくしてもらおうだよ＞と語ります。赤ちゃんは、自分が死んでしまうのではないかと怖れているのです。なんだかとても病気で全然力が出ません。お腹の中に食べ物を保っておけないからです。なぜならお腹はとても小さくて、それにともかく食べ物をお腹のなかでダメにしてしまうのですから。看護婦さんは赤ちゃんがちゃんと食べてお腹のなかに食べ物をしっかり蓄えられるように助けてくれるに違いありません。ところが残念ながらここで交通渋滞に遭遇し、赤ん坊は救急車の後部席で身動きの付かない状態になってしまいます。それでもうこれ以上待てませんので、‘ムーンバギー’に乗って月へと逃げ出したというわけなのです。私は、マルコムが休暇中に、それから週末においても、どんなふう感じていたかを語っていると解釈しました。つまり彼はとても弱弱しく病気だと感じたのであり、だからママ・看護婦さんであるところの私の元へ来なくてはならないと感じたのであり、それでどうしたら食べ物を摂り、お腹にしっかりと蓄え、それで滋養を得、より逞しく成長できるようになれるか教えてもらわなくては思ったのだということをおぼろげに。マルコムは、＜赤ちゃんはね、月に行っても、何も食べるものもないし、呼吸だってできないって分かったんだ＞と言います。それでそれらが供給される地球に舞い戻ってきたというわけなのであります。マルコムは部屋の反対側へと歩いてゆき、そこで窓の棚の上に身を屈めて座り込みました。彼は部屋のこちら側に向って、いかにもとても距離を隔てた、遠い感じの声音で＜どう、聞える？宇宙の果てからだだよ＞と叫びます。私が彼に何ごとかを応答せんとしますと、しかしながら、彼は私に＜しっ、黙ってて…＞と言葉を遮ります。彼は自分一人でブツブツと囁いておりました。私の心はさ迷い始め、彼に注意を払うことに困難を覚えたのです。彼は、赤ちゃんが洞穴の中へこっそり忍び込んで、その中で一生ずうっとそのまま暮らし、決して誰にも見つからないのだということをおぼろげに囁いていたのであります。私は、彼が私の中へもぐり込んで、それで絶対に見つからないように願ったんだねと語りました。それは決して外へと爪弾きされないためでありませぬ。でもそうならばなつたで、もはや私は彼に注意を注ぎ、気に掛けてあげることも出来なくなると思ったのよねと語りました。彼はともかくにも黙って耳を傾けているようでありました。それから引き出しのところに行き、そしてそこに真新しい画用紙が入っているのを見つけ、アレッと驚くのであります。

このセッションで、マルコムは、自分が病気であること、それに内なる心の器 internal container が自分には欠落していることをも認めたこととなります。彼のお腹はあまりにも小さくて食べ物を壊してしまうのです。以前のクリスマスに、彼の母親の容態が良くなかったとき、彼は私が病院へと運ばれてしまうと

思ったのであります。ところが、今ではマルコムは、ママというのは彼女自身、癒してもらって、また抱えてくれる病院だったり或いは看護婦さんであったりもするという概念を得たわけです。彼にはまだ‘待つことの能力’に自信があるともいえませんし、また私が絶えず補給されて立て直り、彼の巧妙な侵入を断固阻むだけの力量があることにも大して確信はないのであります。彼は彼自らの創意工夫で‘心の器’を‘ムーンバギー’という形態で考案しました。それはおそらく彼の絶望的な無力感から彼をなんとか免れさせはするでしょう。しかしその‘ムーンバギー’はまた彼をいのちの源から遠く連れ去ってしまうのです。救急車の後部席、‘ムーンバギー(buggy=buggy つまりくそ！)’、それに洞穴は、すべて肛門性愛の混乱及び理想化を示唆しております。

セッションの中に‘夢のような性質 dreamlike quality’が表出してまいります。それは、今や私にもとてもなじみとなったところの彼の脆く移ろいやすい性質とは著しい対照をなしております。この夢のような性質が生じるようになったのは、マルコムが彼自身の中に感情やら思考があり、それらに対処するには助けを必要とするということに薄々気づき始めたのとほぼ同時であったといえましょう。即ちそれは、赤ちゃんが食べ物を摂り入れ、それを消化し、内側にしっかり蓄えるのに母親の助けを必要とするといったのと同じ意味合いであります。自己表現そして遊戯の中での夢のような領域は、内的現実と外的現実とを仲介させるように思われます。この領域においてコミュニケーションが生じるとき、ただの借りものの言葉ではなく、共有される言語 a shared language が生じるように思われます。マルコムと私自身との間に繋がり link が成立してきたというわけであります。

セッションの中での遊戯資料に時として柔軟性が窺われるようになり始めましたし、以前のようにマルコムがあれこれ空想すること phantasy life が生きてる実生活よりもっと本当 real だと固執することはもはや断念されてまいります。彼は、<どこへでも自由に飛んでゆけたらいいんだけどなあ…>と言います。彼の足に磁石が付いていて、天井をも歩けたらいいけどなあとも思うのでした。彼はこうしたことやら他の願いたい事をもちょっと残念そうに語るのであります。つまりそれは、現実はそのようなものでないこと、そして全て彼の思うごとく事が運ぶとは限らないということを確認し始めていることを示しております。

彼は、万能感 omnipotence が減じてゆくことでの幻滅やら、他にも諸々の感情に直面化して味わう苦痛を回避せんとする方法を多々講じました。セッションは、異なるムードのパッチワークとでも譬えられ、そこではテーマやら感情が次々と現れるや消えたり、また消えたかと思えば現れたりといったことの連続でありました。彼は自ら直視するに堪えがたかったり、また私に我慢してもらえないだろうと彼が思うところの葛藤からはさっさと逃げてしまうのです。ここで「ムーンバギー」は‘空飛ぶ自動車 flying car’へと替わりました。それは厚紙の箱で表象されていまして、それでマルコムは空中を運転してるかのようになつもりになっていたのです、実際のところでは机の上なのであります。<黙れ！ぼく、悲しい感情なんてないんだからね…>と私に向かって叫びました。悲しみ sadness といったものに私は何ら言及してはしませんでしたのに…。彼は苦痛なる感情が自分の中へ無理矢理投げ込まれるように思ったのでした。これは、彼自らの強烈な投影にも関連しております。彼は私にそれらを抱えてもらえるとは

思っていないわけです。どちらかというと、むしろ私が倍返しにして彼へ投げ込むと恐れるのです。

彼は時折、私も旅の道連れとなって一緒に同乗して欲しいと思うのでした。プレイルームを丸ごと‘空飛ぶマシン’にして、混乱 mess は全部外へ締め出すというわけでありました。彼は椅子を私の方へ持ってきて、私の隣に座りました。彼が運転する人であり、これがわれわれの‘空飛ぶ宇宙船 flying cabin’というわけなのだと説明します。われわれはこの‘空飛ぶマシン’に乗ってる唯一の乗客であり、それは宇宙の遥かずうっと彼方にあり、地球とは大いに隔たっているのです。そうした状況で私は、恰も狂気へと引きずり込まれ、現実から切り離された非現実的世界へと拉致されるような感覚に襲われたのであります。こうした世界は、相互的な理想化と、さらには攻撃をすべて外界に投影することで成り立っております。それから治療全体が恰も彼に接收されてしまい、かくして‘二次的な心の器 secondary container’へとすり替えられてしまうというわけなのです。

それから次第に、こうした逃避手段としての乗り物は、地球の方へ、或いは海の方へと方向転換され移動してまいります。‘空飛ぶ自動車’は、‘ホバークラフト’に引き継がれ、それはかなり危険な波間を漂っておりました。マルコムは、‘ホバークラフト’に乗っているときには、空飛ぶ乗り物に乗っているときよりも、いくらか人間的な接触から切り離されているようには見えません。彼は、それを表象させるのに箱でも椅子でも何でもいよいよ、ホバリングするふうにして机の上でぐるぐる駆け回らせて運転する動作を試みさせました。彼はこの遊びを幾らか愉しんだかのようにあります。これは注目に値しましょう。なぜなら普通彼は、愉しむといった余裕を持つにはあまりにも不安が勝っていましたから…。波は、危険と同時に、またいのちや動きを表象しているようでした。私は、恰も母親となり、海のように感じられているみたいなのです。即ち、おそらく危険でもありましょうが、またおそらくは軽快でいのちに溢れているといった感じで…。マルコム自身の活力、内なる命、それに攻撃性はまた、海としての私に投影されていたのであります。

次に登場した乗り物は、‘救命艇’であります。マルコムは最初、いかにも偉そうに横柄な態度を装って、自分がその救命艇の監督官 the man in charge なのだというのであります。私は、彼が‘私の中のパパ’の位置を乗っ取り、私を全面的に自分の管轄下に置きたいのだと語ります。それから彼は、海で溺れかかっている赤ん坊に同一視し始めます。トビウオやら小石やらに襲われ、それに飲み込んだしよっぱい海水で散々な目に遭うというわけでありました。私は、彼が私の中で身動きがままならず、泣き叫び、涙をも飲みこんでしまっているのであり、また固いウンチやらペニスやらが、彼がもぐり込んできたことに怒って、お返しに彼に殴りかかってくると怖れているのだと解釈します。それから彼は、<‘救命ボート’にぼくを助けてくれるライフマン(人命救助者)がいるといいな…>と言います。それは恰も、彼を救助してくれる‘ライフマンのパパ’をも装備している、力強く頼もしい‘救命ボートのママ’としての私を欲しているかのようでありました。またそこには、‘ライフマン’によって占められているところの性器 genital の部分と、マルコムがその内側で往々にして動けなくなってしまうお尻 bottom の部分とが区別される始まりの兆しであるともいえましょう。

この治療2年目の半ば頃、彼はセッションにぬいぐるみを持参してまいりました。蛙さんは、マルコムのように、危険から逸早く飛び跳ねてしまうことのできるものであり、兎さんにしても同様であります。これらどちらにも、‘逃避手段としての器’という共通項があります。しかし、それらには特別に赤ちゃんぽくて柔らかいという性質があり、マルコムはそれを痛く気に入っていたのです。それは彼自身の傷つきやすい幼児の部分を表象しておりました。つまり彼が至るところで出くわすところの残酷で嫉妬深い敵によって、それは絶えず身の危険に晒されているのであります。そうしたぬいぐるみの手触りの柔らかさと、それが攻撃される場所の苛烈な残酷さとは傷ましいコントラストであります。それらの敵とは、人々であったり(実際には動物なのでありますが)、或いは微小なるもの、例えば砂利といったものであったりと実に様々なわけです。これらが、彼の柔らかな赤ちゃんぬいぐるみを、或いは彼自身を叩いたり、噛み付いたり、引っ掻いたりをするとマルコムには感じられるわけなのです。それらの敵とは、実のところ‘彼自身の敵愾心に満ちた部分 the hostile part of himself’であり、それが私と内なる赤ん坊 internal baby もしくは彼の赤ちゃんの部分との間の理想化された一体感に対して激しく憤っているのだという事実が彼がどうにか触れられるようになったのはだいぶ時間が経ってからであります。理想化された母子関係とは、初期の頃のバラバラな部分対象レベルに替わり、より人間的な、或いは動物でもいいのですが、そうした関係基盤に成り立つものと私には思われます。そうであればこそマルコムは、彼の残酷な攻撃性を安心してあからさまに爆発させたりも可能だと感じるのです。‘攻撃する者 attacker’とは、通例1匹の若いフォックスハンド(訳注: 狐狩りの猟犬)で表徴されておりました。それが人や牛のお腹に噛み付いたり引っ掻いたりしたわけなのです。それに食糧を盗みもしました。マルコムはこの‘フォックスハンド’に言及する際に、時折<ぼく>ということがあったのです。

セッションの始まりに親から分離することはマルコムにとって問題でありました。それは2回目のセッション以降ずっとそうであります。最初の頃、マルコムは親から一人離れて私と一緒にプレイルームへ付いて来ることが心底とても怖いことのようにありました。その恐怖がなくなったずっと後でも、彼は両親が廊下の途中までは一緒に付いてきてくれるようにしつこく要求するのです。そして1年半を経て、遅蒔きながら私はMrs. Jと連携し、彼だけが私と一緒にプレイルームへ向うように促してもらうことになりました。彼は怒ったふうな拗ねて不機嫌な顔をしながらも、特に問題もなくプレイルームへとやってきました。彼は扉のがっちりした堅固さにも、私の坐る、がっちりした椅子の木製の外枠やらソファにも当り散らしました。家具が何でできているのかを知りたいがります。それでそれをバラバラにしたいとも思ったのであります。彼は、彼の母親と私自身とが‘親なるカップル parental couple’として一緒に結束して治療上のしっかりした枠組みを設けたことに安堵もし、また憤ってもいたわけです。そうした余裕が出来たことで、彼は家具類をあれこれ吟味し始めたこととなります。プレイルームの中のセッティングを吟味し、また時には私が語る事柄について考える余裕も出てきて、それと並行して彼自らの考えをあれこれ考える思考能力が身に付いてまいります。この2日後、彼は眠れないときなどにどんなふうに「ストーリーをつくる」かを私に語っております。例えば、私がとても‘親切な警察官’で、赤信号を突っ走る危険な車を止めたりするんだとか。。〔たぶん赤信号とは‘乳首 nipple’を表象していますでしょう。夜に閉め

出され待ちぼうけを食らっているとき、それをぶち破って突き進みたいと思うといった具合に・・・] 彼の心の中で‘ストーリー’を抱えられるといった能力は、彼に制限を与え、それで尚も彼をしっかり抱えてもくれる‘親切な警察官・パパ’がいるといった感情にもリンクできましょう。彼はこうして引き続き、折々に‘ストーリー’、‘白昼夢’そして‘就寝時の夢’を見たのであります。

第5回目の休暇を控えたセッションで、マルコムは懸案の〈距離 gap〉に対処する方法を実験しました。彼は輪ゴムを持参し、それを水道の蛇口に括り付け、それからその端を自分の口に咥え、単調な魅惑的なリズムでもってからだを揺すりながら、その輪ゴムを水道の蛇口から遠ざけたりして近づけたりといったことをしました。私はここで、彼が私をまるで‘伸び縮みする乳首’のように彼の口の中にずうっとキープしてきたいのだということを示唆しました。それは、休暇によるセッションの空き gap を感じることにないようであります。そしてそのセッションのお休み gap は、まさに彼が赤ちゃんのとき、乳首が奪い去れたときに彼の口の中に残された空隙 gap のように感じられたのだといえましょう。彼は、我々お互いの間の〈距離 distance〉をコントロールしたかったのです。つまり私を近づけさせたり遠ざけたり、繰り返し自分の思うとおりに・・・それからその輪ゴムが切れてしまい、部屋の反対側へと弾き飛ばされてしまったとき、彼は絶望します。彼はそれを目に入れてはいましたものの、焦点付けてよく見ようとは出来ません。彼は、<もう絶対、他に輪ゴム、見つからないよね・・・>と言うのでした。私はこう語りました。彼は、私を自分の口で引っ張って破いてしまい、だから壊れちゃって、どこかに弾き飛ばされてしまうのを怖れたのであり、それで決して再び戻ってくることなぞあり得ないと思ったということ・・・。

彼は、‘空隙’を橋渡しする媒介物としての或る物を一個のスプーン teaspoon で考案しました。彼はそれを〈スプーン飛行機 spoonplane〉と呼びました。それはたまたま彼の引き出しの中にあつた物の一つであります。そこでマルコムは子豚になり、ママ豚さんがいるボウルから遠く離れた孤島へと逃げる算段をしていたのです。彼はその飛行の途中で出くわすビルの建物をハチャメチャに突き倒し、そして彼の弟や妹の子豚さんたちをも体当たりして海へと突き落としてしまったのです。彼はもはや傍若無人な手に負えないシロモノと化し、‘スプーン飛行機’に乗り込み、高く高くそして力いっぱい大空を駆け回るのでした。私が何か語ろうとしたとき、彼は私を遮り、〈子豚はね、やっぱり親たちに、いつも彼らが子どもたちに言いつけてるみたいなことを言うわけだよね〉と言います。

ここで振り返ってみますと、マルコムは幼児の頃、母親から食べ物を与えられることを拒み、むしろ彼が自分でスプーンを使ってボウルから掬って食べることに固執しました。そのボウルというのも、彼が母親に、〈もっと〉とか〈もういい〉とか、いちいち指図したがったというわけであります。彼は自分の前に立ちただかるお茶碗やらお皿やらどんなものをも突き飛ばし、それに彼の兄弟ですらも蹴散らしたというわけです。彼は自分自身を‘スプーン’に投影し、口唇とボウルとの間の気に入らない空隙を埋めようとしたわけで、ついでにそれで怒りっぽいママやら復讐心に燃えた兄弟らからさっさと逃走せんと画策したことになります。しかしながら、そうして誰とも離れ離れで別々になることは彼にとっては大いなる痛撃として経験されることになるのであります。

休暇直前の或るセッションで、彼は、〈あのさ、ぼく、あなたがぶちのめされてぺっちゃんこになってしまったらいいって思うよ〉と憎まれ口をたたきます。それで私がセッションの最後に、〈いいお休みになるといいわね〉と告げますと、〈そんなこと、ありゃしないじゃないか！〉と言い、私を引っ叩きます。しかしながら、この間彼は、彼自身がぺっちゃんこにぶちのめされるといった悪夢を見ることはありませんでした。それはセッションの中で彼が鬱憤をこのように公然と表出したことの結果でもありましょうし、またそれに伴い、私が彼の鬱憤に耐えられるものと彼が感じたことが原因と思われる。

‘救命艇’も‘スプーン飛行機’も、それ以前の外から絶縁された宇宙の乗り物のようではもはやありません。いずれもが外へと開かれた器 container であります。彼は彼の‘防衛的殻 protective shell’から抜け出しており、私に対してもより開かれ始めたといえましょう。‘スプーン飛行機’は宇宙の広大無辺域から母親と赤子との間の授乳関係というマルコム of the 最新バージョンへと舞い降りてきたようであります。ビルの建物とか海、そして子豚の万能感のなかには誇張されたものが尚も顕著ではあります。が・・・。

マルコム of the ‘スプーン飛行機’は、「二次的な器 secondary container」と私が名づけたところの最後の‘乗り物’であります。これが回避せんとする葛藤はまだ認められるものの、それらは回避とはまた別の、普通にもっと直接的な方法で表現されております。と申しますのは、こうした‘乗り物’はおそらく、マルコムが持参したミルクやらブラックカラントのジュースで充たされた赤ちゃん用哺乳瓶によって引き継がれたものと思われるのであります。彼は、彼の自前の‘乗り物’に逃げ込んだのにも似て、時として哺乳瓶へと退行しております。ここでますます食べ物を与えられる関係性 feeding relationship に重きが置かれるようになってきております。尤も、現実にはそれがなかなかうまく行かなかったわけです。

マルコムはおもちゃの動物たちと遊ぶことを続けておりましたが、その遊びの中で食べ物を与えられる関係性 feeding relationship が攻撃的とされ、誹謗中傷され、或いは彼自身の感情そのものと今や認められるようになってきた、それらの動物たちによっていっそう多様なかたちで肩代わりされるに至っております。

7月の或る日のセッションで、マルコムは間近に控えた休暇について、彼の傷ついた思い wounded feelings を吐露しました。彼は、私が彼を診ていないときに他の子どもらを診ていたと言うのです。それから粘土で蛇を作り、それから太く低い、いかにも支配的な声音でもって、その蛇は部屋中をいっぱい埋め尽くすことができると脅すのでした。そこで私は、彼が私の内側をいっぱい埋め尽くし、そして私の部屋も丸ごと全部占拠したいと思っていること、それはパパが私を彼の‘ペニス’で満たし、‘子どもたち’を与えることを断固やめさせたいと願うからなのだと解釈しました。すると、マルコムは蛇を床に落としてしまいます。それで2つに壊れてしまいます。彼はそこで、〈ママとパパがこっそり囁いているんだよ。赤ちゃんをつくらうって・・・ね〉と言います。彼らはお互いに食べさせ合う事で赤ちゃんを作る

んだと言います。それから彼は怒ったふうになり、彼らは鰐みたいにお互いを噛みあっているんだと言います。そして、それら鰐を残酷にも握りつぶしてしまったのであります。そこで私は彼に語りかけます。彼は私とパパとがお互いを噛み千切って、ぐしゃぐしゃになってしまえばいいと思ったのであり、その理由は私がパパやらもしくは赤ん坊に何か食べ物をあげたり、それにパパが私になにやら食べさせて赤ん坊を作ることをさせたくないからなのだとということについてであります。詰まりのところ、彼は私を全部彼だけのものにしたいというわけであります。

セッションの別の或る時のこと、マルコムがもっと穏やかな気分でしたときですが、彼は雌の牛さんと子牛と一緒に遊んでおりました。彼は、子牛がママの牛さんのお腹にもたれて、その乳首からおっぱいをもらっていると言います。彼の話しぶりからして、私にはまるで彼が私のお膝の上に坐っている赤子のように感じられたのです。その少し後で、彼は、ちょっと悲しげに、<子牛はね、ママにもたれかからないとちっともうまく歩けないんだよ>と言います。なぜなら子牛の骨はとっても弱いからなのだと。

以上の2つのエピソードを照らし合わせますと、なぜ赤ちゃんの子牛がそんなにも弱々しげなのかということはたやすく推察できるように思われます。即ち、蛇のエピソードでいいますと、両親間の関係性は握りつぶされ、そして貰う・あげるといった互いに与え合う関係がぶち壊されてしまっているわけなので、すから…。マルコムの内側の枠 internal framework もしくは骨組みが育ってゆくとしたら、そしてまた彼の情動的ないのちが治療を受けるなかで健やかに充たされてゆくとしたら、それはセラピストがその転移状況において‘母親’として、力強い‘内なる父親’および‘子どもら’との間に繋がりを得ていることが感じられるといった‘与え合う関係性 feeding relationship’を彼がうまく活かしてゆくことができることがその前提となりましょう。

■総括

以上のように、マルコムの不安感を抱えるための‘象徴的な器’の基盤として治療上の物理的なセッティングがどのように設けられるに至ったかについて述べてまいりました。まず最初に、時間的並びに空間的な境界 boundary が攻撃されたのでありますが、それは治療上の制約を除去せんとする企てでありました。また、部屋の中にある物たちが猛攻撃の憂き目に遭いました。それらがセラピストのからだ、それからマザリングと性的能力を表象しているからであります。マルコムはそうしてセラピストを完璧に我が物として占有することに執拗に執着したわけであります。次いでこれらの猛攻撃は、取り返しの付かない損傷を与えたと感じ、それに恐らく何らかの懲罰もあり得るものと思うことで、いっそう苛烈な不安感をマルコムの中に惹起したわけでもありました。さらにセラピールームそしてそこにあるさまざまな内容物、そしてセラピストの役割の境界 boundaries は、徐々にマルコムの感情やら不安感を抱えるところの‘器 container’としてのセラピストへの信頼感を表象するようになってまいります。

これまでに語られた治療期間の中で、マルコムは自分の破壊性が招く結果についての不安感から彼自身を防衛せんとするために彼自らの手で器としての‘乗り物’を考案したわけですから。彼はそうした

‘乗り物’ シリーズが彼をいのちからそして成長からどんどん隔ててゆくことを発見するに至っております。次いで彼は、彼自らセラピストにより接近し得るような‘乗り物’ シリーズを考案してまいります。‘乗り物’ は外へと開かれたものとなり、より小さめで、そしてより害の少ないものとなってゆきました。マルコムこれらの‘乗り物’ に対する態度も、より生き活きとして、そこには遊びの要素も増えてまいります。そして彼は徐々に‘乗り物’ から自ら脱却し始め、セラピストに対してもまた自分自身の情動的いのちに対しても直接的な接触を保つことができるようになってゆきました。彼は、感情 feeling を抱えること、そしてそれについて考える事をも出来る能力を習得していったのであります。彼は、自分が誰かと‘与えられ貰う関係性 feeding relationship ’ を分かち合うことや維持することの難しさがあるといったことをも直視できるようになったわけです。また、彼のセラピストに対する破壊的な攻撃が、彼自身の内的な情緒的様態を弱体化し、そこからまた自らの自立心をも減じてしまっていたことをも洞察し始めるといった、そうした端緒がここに至って開かれたといえましょう。

※参考文献目録:

- ・Bion, W.R. (1962) Learning from Experience . Heinemann: London.
- ・Bion, W.R. (1970) Attention and Interpretation. Tavistock: London.
- ・Segal, H. (1957) ‘Notes on Symbol Formation’ International Journal of Psycho-Analysis, 38.
- ・Winnicott, D.W. (1965) ‘The theory of the Parent-Infant Relationship’ in the Maturational Processes and the Facilitating Environment. Hogarth Press: London.

※原論文名及び出典:

《The Development of Containment in a three to five old boy》

by Kate Paul

【Journal of Child Psychotherapy】 volume3. Issue4. 1974

【訳者あとがき】～‘手のある’セラピストとは何だろう～

山上 千鶴子

ロンドンでの1979年初秋、私は帰国を控えて【タヴィストック】の図書室で重要と思われる参考文献をあこれ漁っていた。そして目ぼしいものを可能な限り図書室の備え付けの複写機でせっせとコピーをしていた。チャージされるコピー代には内心ヒヤヒヤしながら…。このKate Paulの論文はそれらのうちの一つである。つい最近、倉庫の段ボール箱から取り出してみて、驚いた。私の記憶の中ではとくに消失していたはずのそれら印字された文字は今尚そのままかき消えずにあった。それが不思議に思えたほど、遠い遠い昔の名残りである。3-5歳の子どものセラピイの記録というのも珍しい。それがまず注目された。先頃【プレイグループの子どもたち】の観察例をアップロードしたのだが、それで自然kate Paulにprivate supervisionを受けた当時の記憶も懐かしく甦りはしたものの、この論文については失念していた。彼女の「症例マルコム」はちょうどプレイグループの子どもらの年齢とも一致する。事実私が遭遇したプレイグループの子どもたちの幾人かについて、今更ながら観察資料を纏めてみて私の中で改めて気掛かりが残された。それで、もしも彼らがセラピイを受ける機会を得たならば、どんなであったろうと遅蒔きながら私の関心を刺戟したわけでもあった。そして改めてこの【症例：マルコム】を読んでみて、ああ、なるほどと、多々感じ入るものがあった。マルコムの心的葛藤に折々プレイグループの子どもらの誰やら彼やらが重なる。かつて私の視界を素通りし、見過ごしにしていた数多の心的事象がくっきりと見えてきた。嬉しかった！大いに啓蒙される思いがした。

振り返ると、私が【タヴィ】でご縁が得たのは、特にマーサ・ハリスとマーガレット・ラスティンのお2人であるが、Kate Paulは、マーガレット・ラスティンの‘妹分’のような印象があった。事実、当時Kilvernのマーガレット・ラスティンのご自宅の二階が彼女のお住まいで、そこに、確か1977年頃と思われるのだが、マーガレット・ラスティンのご紹介を得て私は彼女の元に通っていたのである。Kate Paulは長身の痩せ型で、楚々とした趣きがおありだった。フロアリング張りの居間にはチェロが置かれてあって、それが彼女の静謐な雰囲気似合っていた。率直な物言いで、<メラニー・クラインのこと、わたし最初はね、クレイジーcrazy だって思ったのよ>と微笑しながらおっしゃって、好感を覚えた。でもどうやら【タヴィ】の中でも珍しく、ナイーブでシャイな人のような点があった。その点について、ちょっと面白いエピソードがある。いつぞや或る夏の日、マーサ・ハリスの別荘でパーティが催された。【タヴィ】の誰もがこぞって遠路はるばる手料理やらワインの瓶やらを持参して駆けつけたのであったが、私は同期のノエル運転する車に便乗させてもらい、彼の新婚の妻エルシーと共に、その優に2時間も掛かるドライブを愉しんだ。ようやくたどり着いた、その別荘はちょっと山荘っぽい創りで、視線の遥か向こうにはかすかに海が眺望され、広い庭は野趣に溢れていた。全然きどらない、くつろいだ雰囲気、集った【タヴィ】関係者とその家族らで狭い室内も庭も溢れていた。柔らかな日差しの中で誰もが和気藹々として、われわれはまさに文字通り《タヴィ・ファミリー》なのであった。Dr.メルツァーの存在もそこで初めて眼にした。食べ物と飲み物はふんだんにあり、華やいでいた。テーブルの上に置かれた私の手作りの巻き寿司が何だかちっちゃく見えて、ちょっと不安に覚えた記憶がある。そこにはKate Paulはいなかった。それで後日お目に掛かった折彼女に不参加を質したら、<だって、私はちょっとね、畏れ多くて a bit scary…>とモゴモゴ

と口籠ったから、意外でヘエッとびっくりした。マーサ・ハリスに対する畏敬の念をそんなふうに表示彼女が奥床しいと私には映った。深く想いを心の内に抱える人なんだというのが印象として残った。

私が【St. George's Hospital】を去り、私の直属の上司であった Senior Psychotherapist のジョン・ブレンナーもやがて引退を決意し、自分の後任に是非にも **Kate Paul** を懇望した。これは児童精神科病棟全体のいわば‘相談役’といったところの、極めて重要なポストなのである。病棟内の政治的攻防戦の末、ジョンの奮闘もあって、ついに **Kate Paul** の採用が実現したとき、私も大いに喜んだ。私は Private Supervision 以前も以後も彼女とは交流はなかったわけで、だから彼女が優秀なのは間違いないとしても、私がこれほど彼女を文句なしに気に入っていたのはなぜだろうとちょっぴり訝しく思っていた。その謎が氷解した。この論文だったのだ！なるほど、これだったのだと悟った。この論文については忘れていたのだが、当時読んだ時かなりのインパクトを感じたに違いないだろう。【症例：マルコム】を読む限り、確かに私が観察したプレイグループの子どもらのどの子よりもマルコムの病態像は重いと言えよう。サッシャとはちょっといい勝負かなとも思えたが…。事実私もサッシャとの間では結構テンヤワンヤしたもののだが、あの静謐と秩序とが似つかわしい **Kate Paul** がと思うと、マルコム相手にまさに‘髪振り乱して’とでも言えそうな彼女の奮闘ぶりが実に傑作(!)なのである。よくぞ踏ん張った！と褒めてあげたいような…。と同時に、やはり感嘆が頻りなのである。どちらもがすてきだ。双方共それぞれの「転移」と「逆転移」とが切り結ばれるさまが実にみごとなのだ。何よりもここで彼女は己れの「逆転移」を、即ちマルコムが己れに投射してくる、まさに混乱 mess そのものを収める心の器としての己れ自身を丁寧にそして誠実に物語ることに成功している。ここに彼女のセラピストとしての力量が遺憾なく発揮されていると窺われた。

この論文は **Kate Paul** のトレーニング・ケースであつたらしい。詰まりは、マルコムとの治療期間中、彼女のスーパーヴァイザー並びにトレーニング・アナリストに彼女自身抱えられていたということでもある。‘三つ巴’とも重層的ともいえる container がこの治療の背景にあつたことは看過されるべきではない。その意味でも、この論文はクライン派の‘containment’の一つの誇るべき成果結実とも言えるのではないか。かくして、一見して聡明でたおやかな彼女の中に、揺るぎのない強靱さ resilience が鍛えられ培われていったのだと改めて感じ入った。マルコムとの出会いこそ、彼女にとってはおそらく‘火の洗礼 (baptism under fire)’であつたらう。この論文の書かれた時代が1974年といっても、今読んでも決して古びていない。まさにリアリティがある。ここにセラピイの真髓たるエッセンスを見る思いがする。

いわゆる臨床報告としてセラピイの治療経過をまとめるには誰にとっても大きな困難がつきまとう。説明的になりすぎると、その場での生き活きとしたセラピストと患者と交流の雰囲気は伝えられないし。描写的に過ぎると、得てして煩雑となるから、結果的にセラピイの流れの筋をすっきりと辿ることが難しくなる。その点、この **Kate Paul** の論文は、語られる文体としてそれらのいずれのものが程よくブレンドされており、筋(ストーリー)も臨場感もあり、「therapist at work」即ち‘セラピイの現場’を例証するところの、とても稀有なかつ卓越したケースレポートのように思われる。学ぶものは多い。日本の児童臨床に

携わる専門職の方々に限らず、成人相手の臨床家の皆さん方にも読んでいただきたい。基本原理は同じであろうから。これは『Journal of child Psychotherapy』に掲載されたものであるから、勿論《児童臨床》の実際に精通している人たち向けである。本来解説は要らない。だが、ここにはセラピー中のめくるめくように奔出する煩雑な事象がぎっしり詰まっている。そうした実に濃密な時間が‘圧縮’して語られているわけだから、‘解凍’するだけの手間隙が掛かるのは当然である。つまり読者する側が読みながら、それらの言葉をとおして、己れのうちに湧き起こった情動を咀嚼・吟味し、Kate Paul の経験を共有することが求められている。日本におけるセラピーの現状からして、些かそれには無理がなくもないので、やはりここで幾らか私なりの解説を試みようと思う。

まずは、セラピーとは「転移」と「逆転移」が切り結ぶ場に於いてのみ意味を孕むと言わねばなりません。そこには双方の外及び内なる現実そして識・無意識とが纏れ込み、絡み合うのですから、ビデオ撮影も全くのところ無意味です。「therapist at work (セラピーの現場)」が、そこに不在な第三者に分かち合われるべく説明されかつ描写されるためには、セラピストの「逆転移」が物語られることこそ肝心要となります。人は誰も自分の中に見える限りにおいてしか相手を見ることは為し得ないので、‘多重撮影’の映像が氾濫するような渦中で終始一貫‘筋立て’してゆく能力こそ、この論文で Kate Paul がセラピーのテーマとして掲げている containment にも通低する重要な課題であります。

さて、いわゆる Dr. W.ビオンの container とは日本語では‘容器’と訳されていますが、それでは視覚的に誤解を生むように思われる。何故ならばそれはまず何よりも機能(はたらき)として考えられるべきものだからです。container とは‘機能体’であり、敢えて申せば【変容媒体】といったものであります。対象の資質・形質・目的性・方向性・位置などを変態(変容)させるといった意味合いを包含しています。そして、「therapist at work」が container として機能しているということがセラピーの眼目なのであります。因みにそれらの機能を列挙しますと、一つは「フィルター(濾過・filter)機能」、一つは「ナビゲーター(舵取り・navigator)機能」、そしてもう一つは「インキュベーター(孵化・incubator)機能」であると想定されます。もっとも精査してみるならば、他にも様々なものが思い浮かびますが、差し当たりとりわけそれら3つが問われていると考えればよろしいかと思われます。

上記したところの3つのセラピストの containment 機能が、【症例:マルコム】においてその心の変容に反映されてみごとに例証されております。まずはセラピールームで糞便を撒き散らしていたマルコムがやがて制限やら境界を受容し、部屋は「半分クリーン、半分トイレ」と区別され整備されてゆく。そして引き出しの中身も整理されてゆく。そして、もはや単なる自暴自棄もしくは迫害妄想といった混沌に惑溺することなく、真に関心を向けるべき対象への好奇心が芽生えたのです【フィルター機能】。そして、距離 distance を怖れて、〈防御的殻〉なる‘乗り物’で逃避行を企て、宇宙の彼方で迷子になっていたのがやがて地球へと方向転換し、徐々に人との繋がりを甦らせ、慰めの中に抱かれてゆきました【ナビゲーター機能】。さらには、「ストーリーを作る」ことにも表されているように、シンボルを使って彼自らの考えを心の内で夢見、そして育ててゆくという展開に至ったのです【インキュベーター機能】。

さて、ここで打ち明けますに、今回翻訳を試み、最も難解に思えたのは container/containment であります。セッションの中でマルコムが自分で‘乗り物 vehicle’を考案したというのが出てきますが、この場合は motor vehicle であります。それを Kate Paul は‘containing vehicle’として説明されておいでで、とても和訳が難しい。でもそこに何かとても重要なものを孕んでいるように思われる。vehicle とは乗り物の他にも‘媒体’という訳語があります。それは仲立ちするもの・繋げるもの・伝達するものとの謂いです。確かに普通いわゆる乗り物とは、距離を仲立ちする・繋ぐものに相違ありません。

マルコムの悲劇性とはそもそも「繋がりへの攻撃 attacks on Linking」もしくは「繋がりからの離反 uprooting」が招いたものであります。繋がりから遁走し、ついには果てしなくも宙吊りとなるか、墜落の憂き目に遭う。これではまるで‘ウンチ’であります。そして、言うなれば‘ウンチ’には手がありません。ここでの彼の問題とは、それを周りの誰彼に投射していることでもあります。そうして逃げ惑う彼に歯止めを掛け、どこにも身の置き所のない‘ウンチ’のマルコムを抱きかかえんとする‘手’が求められているのです。それが本来 containment の要諦である、と私は考えております。そのためには彼が依存性 dependence を受け入れることが前提でありました。つまり「手のない対象」に‘手’を与えるところから関係性が生まれるのです。マルコムにとって、母親に髪の毛を梳かしてもらうことも食べさせてもらうこと feeding relationship にしても実にそういうことなのであります。それが何故にそれほどマルコムにとって脅かしになったのか、そして何故に遮二無二抗ったのか。それは、愛の対象 love-object にそれ自身のいのちを所有させることを許容し得なかったからでありましょう。自分とは別個の、separate な一人の人として、即ち a person として認めることを頑として拒んだからであります。

そして、最初には遁走の道具でしかなかった‘乗り物’は、徐々にマルコムがセッションの中でこの距離 distance やら別々感 separateness を受け入れるにつれ、その空隙を埋める道具へと変容してゆきます。輪ゴムの伸び縮みの遊びから始まって…。徐々に対象の‘手’を握り入れて同一視を始めたというわけです。つまりリンクする(Linking)能力です。そうしてこれらの乗り物に‘抱えてくれる手’が出現したというわけであります。それは即ち、マルコムの中に自らの依存性を受け入れ、対象を希求し、そして待つということの耐性が培われてまいりました。関係性の中に自ら参加し協同することでもあります。

一般にセラピーではセラピストが手を使うことは極力慎みます。直接患者の身体に触れることは致しません。マルコムがセラピールームに糞便・オシッコを垂れ流しにし、ついにはセラピストがそれをトイレに片付けるといった‘手’出しをすることで環境が整備され、ようやく落ち着いたのは極めて象徴的といえましょう。技法上では掟破りとしても、マルコムが対象に‘手’を持つことを許せないが故の「自家撞着」をこのような切迫した手段で訴えていることがむしろ瞠目に値しましょう。ウンチと同一視したところの‘outer-child(外なる子ども)’としての迫害不安でにっちもさっちもゆかないマルコムなのであります。どうせ排斥されるだけで、要らぬものとして片付けられ始末されるといったことがあまりにも彼にはリアルなのであります。プレイグループの子どもらも折々に<you are poo(おまえなんか、クソだ)!>と悪態を付きます。その侮蔑に彩られたウンチが‘inner-child(内なる子ども)’への羨望に満ちた攻撃

欲にドッキングしますと、それは蜘蛛やら野獣に噛み殺されるといったマルコムが悪夢となるわけです。＜目には目・歯に歯＞というわけで、勿論報復は想定内です。その悪循環に誰が歯止めを掛けられるのでしょうか。トラブルを起こす厄介な子犬が捨てられるしかなかったように、彼にも放逐という選択肢しかないかのようでもあります。ここで‘outer-child 外なる子ども’になることの誇り・矜持が問われてまいります。どこにも‘手’がない、対象にも己れ自身にも、それこそが問題の中核なのです。だから‘手’を持つことなのです。即ち、シンボルを、さらには言葉を駆使せんと学ぶことなのです。

心のマトリックスである象徴的要素としての‘母親おっぱい’も‘父親ペニス’もこの世のさまざまな象徴的‘手’へと変容してゆかねばなりません。究極にはそれは言葉であります。言葉は本来 vehicle なのです。分け隔てもし、かつ繋ぐものであります。【タヴィ】でわれわれはよく‘sorting-out’という言葉を使いましたけれど、つまりは精神分析とはそうしたものだからであります。せつせと片付けるのであります。捨てるものは捨て、収めるべきものは収めるべきところに収めてゆく。セラピイを‘手’がアルとかナイとか評するのは奇妙に聞えませんが、この **Kate Paul** の論文からはそうした、セッションの現場 at work での彼女に充分‘手’が伝わってまいります。そうしてセラピストが containment 機能でもあり、マルコムの心に声 voice と内実 contents を与え、変態(変容)を促したという意味で、即ち **Kate Paul** が containing vehicle(手=心=言葉を有する‘媒体者’)でもあることを例証している。その意味で、やはりこの【症例:マルコム】は人々の記憶に尚も忘れ難い、とても稀有な成功例といえましょう。さらに、これとの関連で申しますと、セラピイ中に語る言葉が‘知的詭弁’を弄することを彼女が自戒しておいでなのは刮目に値する。知的詭弁 intellectual sophistry とは、ピオンの -K と考えていい。そしてフロイトの死の本能、そしてメラニー・クラインの羨望、メルツァーの自慰空想に一脈相通ずる。深いところで人の心を蝕むものでありますから、精神分析がそれとどう闘えるか試されているといえましょう。

末尾ながら、**Kate Paul** の今を書き記しておく。彼女は **Kate Barrows** と名前が変わっておいでだ。現在、【the British Psychoanalytical Society】の Training Analyst であり、Bristol の地で個人開業(private practice)を為されている。また、Tavistock で Child Psychotherapists の養成にも携わり、Bristol の【the Child and Family Service at the Bridge Foundation for Psychotherapy and the Arts】の職務にもある。著述活動も、文学を精神分析に関連させて大いに健筆をふるっておいでと伺う。今や「自閉症」研究でも著名らしい。著作の一つが、『Envy』 Icon Books (2001)である。これは、『Ideas in Psychoanalysis』のシリーズものの一つで一般向けの啓蒙書である。そこで彼女は羨望 envy が最も破壊的な情動であり、かつサイコセラピイにおける最大の由々しき問題だと語っている。ここにクライン派の真骨頂を見る。読みながら、心の縛れがほどける瞬間があった。あっ、そうか、あれはそういうことだったのかと…。平易な語り口がいい。羨望 envy の例証として臨床経験からの引用も具体的でとてもいい。また、シェイクスピアの『オセロ』に登場するイアーゴも圧巻である。このように精神分析の Ideas[観念]が‘文学の力’を借り、臨床の場という障壁を越え、語られてゆく。そして、広く一般の人々にとっても現実味を帯びた‘リアリズム’となってゆく。これも精神分析の一つの成熟の証しかと思われた。励まされたことが至極嬉しい。心躍る。 (2013/12/15 記)